

今日の説教のポイント <使徒言行録 21 章 17～26 節>

①律法とは何なのだろう？

ここに出て来る「律法」とは何でしょうか？ それは昔イスラエル人がエジプトの奴隷であった時、神様に助け出された後に示された「十戒」をはじめとする「教え」を指しています（出エジプト記 20 章以下）。十戒も全て、「～しなさい」「～してはならない」と表現されています。ですから、「信仰を持つと自由でなくなるのでは」と考える人がいても不思議ではないと思いますが、実は、自分で勝手にそう思い巡らしているだけで、聖書が語っていることとは違います。

②大事ななのは、律法を与えられる神様がどのような神様か？

出エジプト記 20 章を開けてみましょう。3 節から、「あなたには、私をおいてほかに神があってはならない」、と戒めが始まります。それぞれ大事な十の戒めです。しかし、ここで一番大事なものは、十の戒めが語られて行く前に神様が言われている一言です。すなわち、

「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」 (2)。戒め、すなわち、律法を命じられる神様はエジプトで奴隷状態であったイスラエル人を救い出して下さった、愛に満ちたもう神様なのです！ 日本語で、「～してはならない」と訳されているのは、実は、原文のヘブル語のニュアンスを十分には表現し切れていません。「あなたは、エジプトからあなたを救い出した私を知っているでしょう。だったら、もう～する必要はないでしょう」、と呼びかけておられるニュアンスの「～してはならない」なのです。

③この神様を知って生きる信仰は、私たちに余裕を与えてくれる！

パウロがどちらが正しいかに拘る信仰を持っていたら、相手の誤解を赦せず、自分が正しいことを主張したことでしょう。しかし、もはやパウロは自分の正しさに拘ることより、相手にどうしてあげたらいいかを重要視できる信仰を身に付けています。なぜか？ 人は皆正しくはあり得ないこと、しかも皆神様に赦されて生きて行けることを知っていたからです。彼は教条主義的ではなく自由です。しかし、それはいい加減な自由さではなく、イエス・キリストを見つめ、イエス・キリストにしっかり根ざした揺るがないものに立つ自由さです。